

『老い』を描く

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

高齢化社会

日本の人口の減少は何年も前から続いているが、誰もが危機感を感じながらも一向に解決の兆しは見えない。

同時に高齢化社会の問題点も連動して随分前から語られてきた。
今回は私がこれまでに描いてきた作品の中から老人をテーマにしたものをチョイスして並べる事にした。

若者はこの先、自分の老後生活より、たくさんの高齢者の生活を支えてゆかなければならない現実と直面するのだ。
倍賞千恵子主演で作られた映画『PLA N75』は現代版姥捨山映画だが、そんな時代が来るのではと不安になる。



背負う物

(2005年作)

飛び出し注意



高齢者による交通事故は近年の大きな社会問題であり、免許証の自主返納を推奨する動きも盛んだ。しかし車を諦めた高齢者にとつての移動手段となる電車やバスの路線は次々と削減されたり廃止されたりして、高齢者には日常生活に不便を強いられる地域も増えている。そんな状況を見ているとなかなか簡単に免許証を返上する気にならない人も多いだろう。

調べてみると年間の交通事故死亡者の55%前後が65歳以上であり、この割合は死者数が現在より2000人ほど多かつた10年前からほとんど変化はなかった。

滋賀県は知る人ぞ知る『飛び出し坊や』の発祥の地であり飛び出し坊やの多い地域で有名なのだが、次は『飛び出し爺車』というのを作ってくれないかなという漫画である。



水位

病院を舞台にしたヒトコマ漫画は昔からある定番ネタである。
中でも点滴のシーンは最も病室の雰囲気作りに適した道具立てだ。
私も昔からこのアイテムを様々なアイデアと組み合わせ描いてきた。
私自身はこれまでの人生で入院生活は一度も経験する事は無かったし、点滴を受けた事も無いのだが、家内をはじめとする身内の入院生活の場面でそれを目にする度、克明に記憶してきた。



スパゲティ状態

点滴のある風景

昨年、生死を分ける大手術を経験した友人から描き下ろしのヒトコマ漫画を依頼された。それは24時間体制で自分を見守ってくれた病院のスタッフに感謝のしるしとして贈るのだと言う。

点滴のチューブと、手元に用意されたナースコールのボタンがモチーフだった。これが母親に繋がるへその緒のように思えて気持ちが落ち着いたのだと語る彼の言葉が強く心に残っている。



充電中



抜け殻

大手の企業を退職して経済的な不安は無いものの、毎朝起きると、愛犬の散歩以外は何もする事が無いのだと語る友人の顔に年齢以上の老いを感じた事がある。定年後の人生をいかに生きるかは誰もが直面する課題である。

夏に目にするセミの抜け殻は、長い地中での幼虫の時期を乗り越えてついに成虫となり華やかなステージへ飛び立った飛躍の象徴に見えるが、過去の社会での成功や肩書きを脱ぎ捨てた後に何かあるのかはそれぞれのそれまでの生き様によって大きく異なるだろう。人は自分自身の抜け殻に何を感じるのだろうか。